



Title	インディアンは,11人いたはずでは?-ヘミングウェイの「10人のインディアン」について-
Author(s)	池内, 正直
Citation	明治大学教養論集, 384: 1-19
URL	http://hdl.handle.net/10291/5208
Rights	
Issue Date	2004-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

インディアンは、11人いたはずでは？

——ヘミングウェイの「10人のインディアン」について——

池 内 正 直

はじめに

Ernest Hemingway の短編佳品 “Ten Indians” は、1926年5月に執筆され、その後1927年に出版された短編集 *Men without Women* に織り込まれた作品である。このころ作者は、マドリードの初夏の熱暑の日々に1人耐えがたく、またやがて2人目の妻となる当時イタリアに滞在中の Pauline Pfeiffer への恋情を抑えがたく、ここはただ「書くこと以外に術はなく」、この作品をはじめ、“The Killers”、“Today is Friday” の名作3編を、たった2、3日の内に一気に書きあげたといういわくつきのものである⁽¹⁾。

つまりこれらの3作品は、作者の最初の結婚による幸せな “lovely magic time” が遥か彼方に過ぎ、今では “nightmare winter of 1925-26” から、“murderous summer of 1926” にと続く⁽²⁾、嵐のような時期のもので、作家自身の内面の苦悩や動揺を反映するかのようには、ほかの短編には見られないような過激な題材を扱った作品なのである。“The Killers” は、仲間を裏切ったボクサーとそれを追っている2人組の殺し屋の話だし、“Today is Friday” は、キリストを磔り付けにしてきたばかり兵士達の姿だし、「10人のインディアン」は、(表向きは) Nick 少年の有頂天の恋の喪失の物語だから。

本稿では、この「10人のインディアン」をとりあげ、その作品の読み方

を、さらにもう少し多様な角度から検討してみたい。それというのも、1) 作家のこの特殊な時期に書かれたこの作品は、2) それがもつ様々な主題のほか、3) 作品のなかでは十分に表現されたり示されたりしないままに、読者の判断や想像に委ねられ、保留されている箇所（いわば正解のない質問/疑問や、表現されなかった表現）が何箇所もあるからである。さらにまた、4) として、作品のタイトルは「10人の…」となっているにもかかわらず、作品をよく読めば、実は「11人のインディアン」が、話題にあげられているからである。（作品を普通に読むと、酔っ払ったインディアンが9人いて、やがて主要な話題になる主人公のガールフレンドのインディアンの話でちょうど10人めになる。それゆえ、〈これでピッタリ10人のインディアン。それでいいじゃないか〉と、誰しも思ってしまう。少なくとも、筆者〔を始め、何人かの学生諸君〕は、そうであった。ところが、本年（2003年度）筆者が担当する1年生のゼミで、ある学生から「じゃあ、終わりの方に出てくる、少女の男友達のインディアンは、どうなるんですか？ これを入れると全部で11人になるんじゃないでしょうか…」という発言が飛び出した³⁾。虚を突かれた筆者は、「うーん…、それもそうだねー。誰か、どうかな？ ——では、これは、暫く保留ということにしておこう」と、お茶を濁した次第であった。そしてそのまま今日にいたってしまった…）

以下本稿では、作品についての幾つかの読み方を検討したのち、上述の保留中の問題の解答についても考えをめぐらしながら、それによって（多分）いっそう適切でまっとうな作品解釈にもなるような読み方をめざして、思考を展開していきたい。作品は手元のテキストではたった6ページ、翻訳でも文庫本にして10ページほどのものだが⁴⁾、まずそのストーリーを5部に分けて、要点を記しておこう。

1. 失恋の物語？

まずストーリーの展開については、およそ次のようにまとめることができるだろう。

1. ある年の独立記念日（7月4日）の夕刻、ニック少年は Garner 家の一家の馬車に乗せてもらって、その1日を楽しんだ町からの家路をたどっている。途中には酔っ払ったインディアンが道路で寝込んでいる。ガーナー氏は「町外れからここまでで9人目だ（331）」と言いながら、男を道路脇に引きずり出す。
2. ニックはガーナー一家の息子たちに、インディアンの少女 Prudence Mitchell と毎日会っていることを暴露され、「照れくさく (felt hollow and happy inside himself) (332)」思う⁶⁾。ガーナー夫妻からも、2人の一層の親密な交友を冷やかされたりそそのかされたりする。
3. ガーナー一家にたどりつき、ニックは父親の待つ自宅に急いで帰る。
4. 親子はその1日にあったことを語りあう。ニックは父親から、ブルードゥェンズが森の中で Frank Washburn と「大はしゃぎしながら、…地面をころげまわって、…楽しんでた (335)」ことを聞く。やがて嗚咽をこらえきれず、食欲もなくなる。
5. 床に入って湖水や松籟の音を聞きながら、胸が張り裂ける気持ちを覚えていく。翌朝も目覚めて暫くすると、心の痛みを思い出す。

この日はアメリカ人にとって、1年のうちで最大の祭りの日であり、ニックにとっても、もっとも楽しく過ぎていいはずの1日であった。その幸せな1日の最後のときにいたって、胸の張り裂ける思いをするとは、なんと皮肉なことであろうか。もっとも、先住民のインディアンにとっては、この日が最大の屈辱の日であるという、もう1つの皮肉が重なるのではあるが⁶⁾。そのドラマが、どんな風に表現されているか、まず、ニックの恋愛の

話題に焦点を当てて、もう少し詳細に読んでみよう。

ニックは、その日みんなで町へ行くことができ、野球を楽しむこともでき、「すてきな1日、楽しかった1日 (333, 335)」を過ごすことができた。そのうえ、毎日会っているほど仲がよいブルーデンスのことを、周りの人々から冷やかされられて、上述のとおり「空ろさを帯びた幸福感をひそかに味わう (felt hollow and happy inside himself)」こともできた。恋の始まりを経過している者の常として、それを冷やかされれば嬉しいし、また同時に恋しい者がいる喜びと、その恋しい人が今すぐ傍にいないという侘しさとの、最高に贅沢な幸福感を享受しているのである。(これは恐らく、スペインでこの作品を執筆している作者が、ポローニャの空の下にいるポーリーンに寄せていた切ない思いが、まるごと表出された一節であろう)。

楽しいことがいろいろあった1日の終わりには、彼は自分の靴をガーナーさんの馬車に忘れてくるほどに (334) 舞い上がっている⁽⁷⁾。お腹もぺこぺこで (334)。そんなタイミングのときに、父親からブルーデンスとその男友達と一緒にいたことを聞かされれば、それについて根掘り葉掘り聞きたくなるのも自然な人情である。彼女が、「どこで、何を、誰としていたか、…どんな風だったか、嬉しそうだったかどうか、森のどのあたりにいたのか (335-6)」等々と、畳み掛けるように。これに対して、「ずいぶんサディステイックに息子に応えている」⁽⁸⁾父親が席を立った後、ニックは泣き始める。食事が喉を通らなくなったとき (336)、恋の病いはもっとも重症に陥ったときである。

その後、彼はベッドで枕に顔を伏せて、「心が張り裂ける (336)」思いに圧倒される。感覚も思考も麻痺した状態で、受身的な聴覚だけが、隣の部屋の父の動作や、家の外の波や風の音を感じている。彼の胸の痛みは、直接的な文字で表現されていないが、その日の夕食時までの高揚から、“父の残酷趣味的な”話を経て、最後の無感覚状態への墜落に見るコントラストのなか

に、十分読みとることができるだろう。夜中に目覚めても、朝になって目覚めても、風や波に対する聴覚が働くだけで、思考はそのまま急停止してしまっている。「心が張り裂けているのを思い出すのにも、ずいぶん時間がかかった (336)」。読者はそこに、彼の喪失感の大きさを読みとることができるだろう。

この作品は少年の初恋の終わりを、切り詰めた文章で、余計な説明を一切加えずに描いている。背景にはミシガンの大自然があって、楽しい祭りの日があって、そのなかを馬車や時間はゆるやかに進む。ニックにとってそれは、周囲の人々に励まされさえた恋のはずであった。だが、終末は急転直下、突然にやってくる。しかも、相手の少女に裏切られるような形で。そのような意味でこの作品は、少年の儂い恋を、美しく痛ましく描写した名品と読んでよいであろう。実際周知のとおり、この作品の原稿段階のタイトルの候補のなかには、「失恋 (“Broken Heart”）」という案もあったのだから⁹⁾。(心に残る名作だあるが、それにしても、この作品に対する評論は少ないし、アンソロジーに編み込まれることも少ないのは不思議)。

2. もっと皮肉な物語？

前述のとおり独立記念日は、先住民にとっては決しておめでたい日ではない。むしろヨーロッパ人に土地を奪われ、病気を移され、生命すら奪われたことを思い出させる、もっとも恨めしい日にはかならない。この日に、インディアンたちが泥酔して自我を忘れた醜態をさらすのも、また当然のことであろう。だが、ニックの周りのヨーロッパ系と思われる登場人物たちは、そのあたりの事情にまったく気付いていない。作中には明らかにされていないが、このインディアンの集落の近隣に避暑や狩猟のために来ている者もいる。

ガーナー夫人は、「あのインディアンの連中ときたら (331)」と、「[しょうがないわね/みっともないわね、] と言わんばかりの、] 先住民に対する

(いわれなき) 軽蔑的な思いしか抱いていない。息子らは「連中はみんな同じズボンをはいてる (331)」とか、「あの女たちはスカンクみたいな匂いがする (332)」と侮辱している。夫人はさらに、息子のカールに「あんたって女の子にもてないのね。インディアン娘 (squaw) にさえも (332)」と言い、夫の耳元に何か (インディアンを見下すような〔と想像できる〕こと) をささやいて彼を笑わせている。そのあたりのやりとりは、ガーナー氏が、「女の子にもてなくても何の問題はない」と⁶⁹、息子を慰め/冷やかしながら、こんなふう生き生きと描かれている。

“You’re all right, Carl,” Joe Garner said. “Girls never got a man anywhere. Look at your pa.”

“Yes, that’s what you would say,” Mrs Garner moved close to Joe as the wagon jolted.

“Well, you had plenty of girls in your time.”

“I bet Pa wouldn’t ever have had a squaw for a girl.”

“Don’t you think it,” Joe said. “You better watch out to keep Prudie, Nick.”

His wife whispered to him and Joe laughed.

“What you laughing at?” asked Frank.

“Don’t you say it, Garner,” his wife warned. Joe laughed again.

“Nikkie can have Prudence,” Joe Garner said. “I got a good girl.”

(Ita. mine 333)

最初のイタリックスの箇所 (「パパはいくらなんでも、インディアンの女の子となんかとつきあったことなんかないよねー」) は、ガーナー家の息子の1人が、先住民に対して母親と同様の、侮蔑的な態度をもっていることをよく示す一節である。2番目のイタリックス体にした一節では、具体的に

どんな内容の言葉が囁かれていたのか、作者はいっさい語っていない。だが、ガーナー夫人の言葉は、恐らくインディアンについての品のない冗談か、侮辱的なものであるのは文脈から明らかだろう。(たとえば、夫の直前の言葉を受けて「インディアン女は身持ちが悪いんですものね/すぐ浮気をしますからね」といったこととか、あるいはその前後のガーナー氏の笑い方から推測して、「昔はあなたもインディアンの娘と遊んでたことがあったわね」といったことだろうか)⁶¹。

先住民に対するこのような無理解は、ニックの父親にも見ることができ。つまり、それらの人々のことをパターン化、一般化して考えて、その日インディアン集落の「連中はみんな町へ行って酔っ払っていたんだらう(335)」と語ったり、息子のガールフレンドの様子についても、まったく無神経な語り方をしたり、応答したりするところなどに。その民族の人々個性を慮ったり配慮する思い、すなわち、“Everyone is Special”の精神が⁶²、欠けているのである。また、いつもより“grand(334)”な夕食を用意しているところにも、この祝日の白人共通の、(先住民側から見れば)身勝手な気持ちは示されている。

一方、夕食のテーブルで、父親の語るブルーデンスの様子からは、彼女の明るく、屈託のない姿が浮かんでくる。(ただし、父親の語る事柄が〈信用できるかどうか〉、ということについては、後に検討する)。ニックが寄せている思いなど、まるで眼中にないかのように「楽しみ、ころげまわり、悦んでいる(335-6)」のである。ここは彼女が森のなかの大地の上で、男の子と愛し合っているように読める個所だが、このようなことは、先住民の習慣からすれば、またこの作家のほかの短編、“Fathers and Sons”の女の子の行動パターンからすれば、決して異常なものとは言えない。むしろ、おおらかで豊饒な太古の自然につながるような懐かしさが感じられる個所である。(先住民や大自然の美質や荒廃については、上述の“Fathers and Sons”や、“Up in Michigan,” “The Doctor and the Doctor’s Wife”などの短編や *The*

Green Hills of Africa (1936) などによく見られ、この作家のもう1つの特徴を示すところである)⁹³。

それにしても彼女の大胆な行動ぶりは、ガーナー一家の人々やニックの父親の姿勢とは、なんと対照的な有様を示していることだろう。白人も白人なら、先住民も先住民で、それぞれの思いや行動は一方的で、共感しあうところがまるでない。こうして、ニックは(主観的には)惨めで、(また客観的には)滑稽な失恋を経験することになる。このような観点からすると、この作品は、7月4日を巡って、またニックを軸にして、上述のような様々のコントラストの面白さを織り込みながらの、先住民と後から来た人種たちの思い違いやすれ違いの様相が描かれている。その意味でも、単なる失恋の物語を越えて、アイロニーの効いた味わい深い短編小説として読むこともできるだろう。

3. さらに皮肉な物語?

ところで、ニックの父親は、機嫌よく帰ってきた息子にむかって、なぜあれほどまでに“サディスティックなほどに”委細を尽くして、プルーデンスとフランク・ウォッシュバーンの恋の戯れを語るのだろうか。もっとも、それは、彼女との恋愛に夢中になっている息子の質問が、執拗であったからかもしれない。だが、そもそも氏は、その日の午後の散歩で「おまえさんの友達のパルーディーを見かけたよ(335)」などと言う必要はなかったのではないか。まして、その後の話の展開からすれば、息子にショックをあたえることになるはずであり、むしろはじめから口外せず、黙っていてもよい話柄なのである。そういったことを思うにつけても、まず何よりも、この父親の話というは一体〈信用できる話なのか〉、という疑問を抱かざるをえないのである。

そう言えば、プルーデンスが森でフランク・ウォッシュバーンと一緒に大

騒ぎをしていたことを語ったとき、この父親の目は、「息子を見ていなかった (335)」。これは実際のところ、息子の心情が哀れ過ぎて、正視することができなかったためかもしれない。だが反面では、彼が（ひょっとすると、）ウソをついていて、内心に臆するところがあるために、直視できなかったからであると解することもできるだろう。また、少女の名前はブルーディーと愛称で呼びながら、相手の少年のことは、ことさらフルネームで、しかも2回も言及していることも、どこかわざとらしく思えないだろうか。

またさらに、ニックが「お父さんは2人の“姿は見なかった”と言ったじゃない (335)」と咎めるところがある。確かに父親の言葉には、ややシドロモドロのところはなくはない。その点、氏の話の正当性が、いささか疑われるところである。もう1個所気になるのは、氏が息子との会話の途中で、立ち上がって台所に行くところ。このとき、氏はわざわざそこに行って、何らかの用事を足しているようには、いっさい述べられていない (335-6)。これは解釈の仕方によっては、息子の悲しむ様子を見ないようにしている、氏なりの一種の優しさと理解することも可能だろう。だがむしろ、氏自身の困惑を隠すための、弱気で逃避的な心情の表れと、とれなくもない。概して、この父親の息子に対する言辞や行動には、曖昧さや不可解さが付きまとっているのである。

また、Susan F. Beegelのエッセーによると、“Ten Indians”の結末に近いこの2人の対話が途切れた個所で、草稿の段階では、父親が1人たたずんで、次のように祈っている文章があったという。

“Dear God, for Christ’s sake keep me from telling things to a kid.... For Christ’s sake keep me from ever telling a kid how things are.”¹⁰⁴

息子の胸を痛めるようなことをさんざん言ったあとで、「子供に、いろんなことを語ったりいたませぬよう、…世の中が一体どんな仕組みになってい

るかを語ったりいたしませぬよう、どうかお護り下さい」と祈るのも、勝手な言いぐさのように思えるところだ。(だからこそ、出版時にはここは削除したのだろうか)。だがしかし、先の親子の対話の謎に関連して、この個所を考慮に入れば、氏は息子に対して、テキストに表れていること以外に、語りたいたいことがもっといろいろあったのかもしれない。あるいはまた、テキスト内で語ったことについて、もっと説明を加えたかったことがあったのかもしれない。

このことと、氏の言動の曖昧さを考え合わせると、その日に氏の目にしたというインディアンの少女とその男友達の戯れている光景は、氏の創作、フィクションであり、実はウソの話であった、と考えることはできないだろうか。(もしそうだとしたら、その理由については、後で考えていきたい)。草稿の削除された個所は、氏としてはそのあたりの事情や世の中のことについて、息子にもっと存分に説いたり論したりしておきたかった、という心情を物語るころなのであろう。そして、もしその話が実際に氏のでっちあげたウソ話だったとすれば、その際の氏のニックに対する供述や挙動の曖昧さや不可解さも、かなり納得がいくものになるのである。

またこのことと、本稿の冒頭で疑問にした作品タイトルの不可解さ、つまり〈言及される「インディアンは11人いる」のに、なぜタイトルは「10人のインディアン」になっているのか〉という疑問を考え合わせるたとき、この11人目のインディアンは、ニックの父親の話のなかのフィクションであった、と考えることができるのである。つまり、ニックの父親の言葉に出てきたフランク・ウオッシュバーンという男は、氏が実際に目にした男ではないのである。氏のフィクションの言葉のなかだけにしか、存在していないのである。(もしそうだとしたら、その理由については後述したい)。

だとすれば、この作品に登場するインディアンで実在するのは、タイトルのとおりにぴったり10人なのである。つまり、酔っ払いが9人いて、ニックの恋人のブルーデンスが10人めに当たるのである。したがって、この作品

は「10人のインディアン（のこと）」であって、タイトルの正当性はゆるがないのである。（なお、この作品の題名に関しては、『マザーグース』の「10人のインディアン」という歌のポピュラーな題名が、ヘミングウェイの念頭をかすめたであろうことも、十分考えられる。また歌のなかで、10人目のインディアンが、「結婚して、それから誰もいなくなった」ということも、作品のもつ意味に関係があるかもしれない。それについては、後述することになるだろう）。

また実際、ほかのインディアンの名前、たとえば、ブルーデンスをはじめ、Dick Boulton、や Billy Tabeshowなどは、ヘミングウェイの複数の短編作品に再登場している。しかし、フランク・ウオッシュバーンという人物は、他の作品には再登場していない。このことも、このブルーデンスのボーイフレンドが、ニックの父親の頭のなかで創りあげられた抽象的な名前であることの、もう1つの証拠になるであろう。（もっとも、作中の彼女のモデルとなった女性には、実在のボーイフレンドもいたし、彼女は産褥の床で亡くなっているようだ）⁹⁹。

ではなぜ、ニックの父親は息子のガールフレンドに関して、このようなウソめいたことを言わなければならなかったのであろうか。そもそも彼は「おまえさんの友達のブルーディーを見かけたよ」などと言わずもながのことを口にして、息子の心を引き裂く必要などなかったはずだ。人の親なら当然そのくらいのことは、分かっているはずである。にもかかわらず、氏はなぜあえてそんなことを言ったのであろうか。

4. フィクションのなかのフィクション

ニックの父親が、息子にむかって、彼の恋人が別の男性と愛し合っていたとウソをついたのはなぜか。もし氏がそのようなことを言えば、当然息子はひどく傷つであろう。しかし同時に、やがてその恋を忘れようと努めること

は、想像に難くない。実際に父親は、それらのことを十分承知のうえで、あえてその日のブルーデンスの物語を語ったのではないだろうか。それによって、息子がその恋を諦めることを期待して、そんなフィクションを創作したのではないだろうか。

その第1の理由は、氏やガーナー一家の人たちや、この作品が書かれた当時の少なからざる人々のもっていた、先住民に対する差別意識のゆえであろう。この父親も、息子がインディアンの娘と付き合うことに対して、ガーナー一家の人々と同様に軽蔑や反発の感情をもっていたのであろう。まして、万が一息子が彼女と結婚でもすることになったらタイヘン。だからこのウソは、2人を早く引き離すための、実に巧妙な策略であったのだ⁶⁹。

理由の第2としては、この父親が、ある1人のインディアンの男に対して抱いている、屈辱感のためであろう。氏はどこかで、それに対する意趣返しをしたかったはず。そして実は、この作品の表面には表れていないことではあるが、ほかの作品やそれらのモデルとなった人物たちとの関連をあわせて読むと、ブルーデンスという少女はたまたま、“氏に屈辱を与えた先住民の娘”に当たっているのである。

すなわち、ニックの登場する別の作品“Fathers and Sons”のなかには彼のインディアンの恋人 Trudy がいるが、彼女のモデルは Prudence Boulton という少女であり、また「10人のインディアン」のなかのブルーデンスのモデルと同一人物なのでもある。このトゥルーディーは、“The Doctor and the Doctor's Wife”において、ニックの父親に大恥をかかせたインディアンの娘、すなわち Dick Boulton の娘というわけである⁷⁰。ニックの父親が、自分の息子がそんな男の娘とつきあっていることを快く思わないのは、至極当たり前のことだ。さらに一般論として、デイックの娘が医者の子のニックと結婚できれば、デイックたちはご機嫌だろう。ニックの父親としては、そんな男の願望は、木っ端微塵に砕いてやりたいのだ。

ヘミングウェイ研究の泰斗 Philip Young は、父親はその日に「目にした

ことをニックに語ることによって、今度は（自分が屈辱をなめた分を息子に転嫁して味わせてやり）、彼自身が満足を得たかったのだろう」と、一種の発散・昇華説を述べている⁹。確かに彼は、ブルーデンスのふしだらな様子をじっくりと語ることによって、悔しい思いを発散させたかったのだろう。ただそれは、息子に対してというよりも、その娘の父親に対して、意趣返しをしたかったのである。しかも、その娘のふしだらさとは、本稿では（ヤングの文脈を少し外れて、）あくまでもニックの父親の創作によるでっちあげであった。それだけになお、複雑で悪意のこもった仕返しなのである。

以上で、ニックの父親が息子の恋愛に対してとった言動の理由は、おおよそ明らかになったといってよいだろう。だがしかし、ヘミングウェイのこの作品の背後にある、他の作品との関連を視野に入れると、父親にこのような態度には、もう少し別様で重層的な根拠があって、こんな展開になっているようにも考えられる。さらにそのうえ、作家自身の女性や結婚について、あるいは父や母についての考え方も、この作品に何らかの影を落としているのではないだろうか。もしそれらのことを考慮に入れると、この父親の言葉や態度について、あるいはまた「10人のインディアン」について、さらにどんなことが言え、どんなふうに読むことができるだろうか。

5. 作品とその背景の事情

5-1) 作家と女性像/女性たち、そして母親

ヘミングウェイのこの作品の創作されたころまでの初期の作品は、当時の文学の潮流と次のような点で異なっていると言われている。すなわち、文体面での斬新さのほか、扱われるテーマや題材では、露骨でどぎついセックス、暴力、戦争、出産、死など。そしてまたタブーに挑戦して中絶、八百長試合、同性愛、殺し屋、離婚、病める復員兵などが取り上げられているという点で¹⁰。これらのこととも多少なりとも関わりがあるだろうが、この作家

の作品に現れる女性たちも、ある種の特性をもった人物像を呈している。

ヘミングウェイの初期作品の女性像でもっとも特異な点は、母親が（「10人のインディアン」に見られるとおりの）不在であったり、憎しみや無視の対象である（“Soldier’s Home”）ことである。さらに女性や若い妻たちに関して言えば、（いわゆる〈結婚がテーマの作品群〉に見るとおりの）⁶⁹、異性との良好な関係を保っていたり、幸せな結婚生活をしている人物は1人もないということである。いずれの女性も、男性との関係に倦怠したり、別れの瀬戸際にいる。なかには、作中の男たちに、“A man must not marry (“In Another Country,” [271])”とか、“We were returning to Paris to set up separate residences (“A Canary for One,” [342])”などと、あからさまな言葉を言わせている作品もある。これらのことは、作者自身の実生活を様々に反映したものかもしれない。

前述のとおり、短編の傑作を量産していたこのころのヘミングウェイは、2番めのポーリーンと恋愛中だった。そして結婚にいたるが、やがて“忍耐力の弱さ”のために離婚。さらに“記憶力の弱さ”ゆえに、3人めの女性 Martha と結婚、離婚、4人め Mary との結婚にいたる。しかし、間もなく「そう欲望させ、そう決心させた」妻たちを責めるようになり、批評家からは、「すべての女性がヘミングウェイをダメにした (failed/ruined him)」と言われるようになる⁷⁰。さらにヘミングウェイは、母親をその死後まで憎み、Gertrude Stein や Zelda Fitzgerald を軽蔑し、ポーリーンを責め、マーサを罵ったという⁷¹。（随分自分勝手に、男としては見下げた人物である）。

このように、この作家の作品のインター・テクスチャルな関連とか、その実人生における女性関係や経験を見るとき、ヘミングウェイが「10人のインディアン」の父親のキャラクターに、息子の女友達の存在や彼女たちとの恋愛を好ましく思わない特質を付与するのも、極めて自然のことにように思えてくる。換言すれば、作中の父親がニックにウソをついたのは、ヘミングウェイの作品に共通する、女性嫌いの側面とか、女性が男をダメにする

(fail/ruin him) ことを怖れる特質に、根をもっているからと考えられるのである。かくて、父親の願いはめでたく成就する。

5-2) 作家と父親像/父親

ヘミングウェイの作品のなかの父親像についても、ネガティブな描き方しかされていない、という評価が一般的である。インディアンの妊婦の帝王切開手術に見事に成功した“Indian Camp”の父親の医師にしても、彼のヒロイックな執刀振りよりも、その想像力や人間性の欠如や医学という暴力を批判されている⁶³。“False Fathers, Doctors, and the Caesarean Dilemma: Metaphors as Structure in Hemingway’s *In Our Time*”という迫力のあるタイトルの論文の著者 Robert E. Gajdusek によれば、ヘミングウェイの作家人生のごく初期の3篇を見ても、それぞれの父親は「“On the Quai”では存在せず、“Indian Camp”では〔医師/人間〕失格者であり、“The Doctors and the Doctor’s Wife”にあっては男らしさが欠落している」と述べている⁶⁴。まともな父親は、最初からいないのである。

父と息子を主題にしたもう1つの作品“Fathers and Sons” (1933) は、今では成人して息子をもつニックが、父親を回想したり息子の質問に応えたりする有様を全知の視点から語ったものである。ここで描かれる父親は、「神経質で、感傷的で、残酷で愚か、そして悪運にとりつかれた (489) 男で、性的にも不気味であったり (489) いたずらに潔癖であって (490-2)、息子に与えた教育的なものは、狩猟と釣りだけ (490) であった。また草稿の段階で書かれていて、その後削除された個所には、この両親の「共通点のない者どうしの無惨な結婚」のことが語られているという⁶⁵。たびたび言及しているもう1つの作品“The Doctor and the *Doctor’s* Wife” (イタリックは筆者による、) でも、父親は卑屈で弱々しく表現されている。(タイトルが、“...and his Wife”ではない点からして、意味深いであろう。すなわち、夫人は、“彼という男性の妻ではなく、〔彼の〕医師という属性の奥方”という

意味合いになるのだから)。

作者の父親は、作者が28才のとき自殺している。それが、作者の強烈なオブセッションになって、一方では父親への侮蔑、他方では彼自身のマッチョ志向、タフ・ガイ志向につながったことは、周知のとおりである。彼は父の葬儀の時にミシガンに帰省して以後は、1回の短期の帰郷を除いて、一切帰っていないという。故郷も、そこにつながる父親の思い出も顧みようとしない。作者の父親離れの心情が連動していることが、端的にうかがえるであろう。こうしたヘミングウェイの作品や実生活にみられるネガティブな父親像からすれば、「10人のインディアン」の父親に、息子に対するいささかの非情さを具えさせたり、息子に対してウソをつくという一面を与えているのも、決して不思議ではない。

5-(3) この作品と『マザーグース』の歌

ヘミングウェイのこの作品が、『マザーグース』の「10人のちっちゃなインディアン」を連想させるタイトルになっているのは、なぜだろうか。歌のなかでは、10人のインディアンが、次々と(死んで)姿を消していく。まず、「食事に行つてのどをつまらせて、次に寝過ごして、続いて旅行先で、また薪を割っていて、…」死んだり姿を消したりしていく。そして最後に残った10人めは、「結婚をして、誰もいなくなった」のである。ちなみに、英語では次のようになっている。

“Ten little Indian boys went out to dine;
One choked his little self, and then there were nine,
...
One little Indian boy living alone;
He got married, and there were none.²⁹

最後に残っていたインディアンが消えていった理由は、結婚によるものであった。結婚こそが、「誰もいなくなった」原因であった。すなわち、結婚は

いわば“Nada”(「無」“A Clean Well-Lighted Place”(385))の根源であり、呪われてよいのだ。

いささか強引な理屈をこねることになり、気がひけなくもないが、『マザーグース』のこの歌は、ヘミングウェイの意識のなかで、この作家独自の人生観、結婚観の根幹に触れるところがあったのだろう。そしてそのことは、ヘミングウェイの「10人のインディアン」にも反映しているのである。すなわち、ヘミングウェイは『マザーグース』を引いて、言外に自分自身の結婚観をにじませたのであろう。つまり、この作品の父親の描き方にみられ、そして作品解釈の伏線となる、結婚や恋愛をネガティブに見る観点を。

おわりに

ヘミングウェイの「10人のインディアン」は、一見少年の失恋の物語のように見える。しかしこの作品は、さらに重層的な面をもっている。先住民と後から来たアメリカ人の齟齬も盛りこまれている。そして何よりも、この作者のほかのあらゆる作品に共通に見られる、女性嫌い、恋愛および結婚の否定的評価、父性や母性蔑視などの流れに通じる作品である。特に本稿では、ニック少年の父親の発言が〈信頼できるものかどうか〉という1点を基点にして、多角的な考察を進めることができたのではないだろうか。それにより、この作品について、もう1つ別の面白い読み方が可能になったのではないだろうか。

〔注〕

- (1) Kert, Bernice. *The Hemingway Women*, (W. W. Norton & Co, 1983) p. 179. なおこれら3作品を「1日で書き上げた」と語るエピソードもあるようだ。
- (2) Kennedy, J. Gerald. “Hemingway, Hadley, and Paris* The Persistence of Desire.” *The Cambridge Companion to Ernest Hemingway* ed. by Scott Donaldson, (Cambridge U. P., 1996) p. 199.

- (3) 2003年度明治大学政治経済学部1年「演習A」(木曜日,「アメリカの短編小説を読む」)のゼミナールで。発言者は, T. 山本君(2003年, 6月)。
- (4) “Ten Indians” および Hemingway の短編作品のテキストは, *The Short Stories of Ernest Hemingway* (Charles Scribner’s Sons, 1968) による。そこからの引用のページはカッコ内に記す。なお, E. ヘミングウェイ(高見浩訳), 『われらの時代・男だけの世界』(新潮文庫, 1996年)を大いに参考にさせていただいた。
- (5) 上記の高見浩氏の訳語による。(氏が訳稿を作りあげる際に幾多の助言を仰いだ明治大学教授の Mark Petersen 氏によれば, 高見訳のヘミングウェイは, 従来のわが国のヘミングウェイ理解を, 大幅に改革し, 斬新なものにしたとのことである)。
- (6) 今村楯夫, 「ニックと森とインディアン」, 『ヘミングウェイを横断する: テキストの変貌』日本ヘミングウェイ協会編, (本の友社, 1999), pp. 96-7.
- (7) ここでニックの心がいくら高揚していたにしても, 靴を履き忘れて家に帰ってくるというのも妙である。だが, この作品の背景となる時代のアメリカの田舎の子供たちは, 町に出るとき以外には裸足であることが多かったのかもしれない。例えば, William Faulkner の *Light in August* (1932) の第1章の Lena Grove の姿に見るように。
- (8) Beegel, Susan F. “Second Growth: The Ecology of Loss in ‘Fathers and Sons.’” *New Essays on Hemingway’s Short Fiction* ed. by Paul Smith (Cambridge U. P., 1998) p. 97.
- (9) そのほかにも, “After the Fourth” という題名の候補もあったという。Young, Philip. “Big Wood Out There: The Nick Adams Stories,” *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays* ed. by Jackson J. Benson (Duke U. P.) p. 32.
- (10) このあたりの夫妻の会話(「たとえ女の子にもてたってどうってことはない。お父さんをみてごらんよ」/「そうね, いつもそうおっしゃってるわね」…)は飛躍があって, その論理の推移は, 読者の想像, 解釈に委ねられているのである。特に上の下線部はどのように解すればいいのだろうか。たとえば, <たとえ若いころにもてなくても, 今はちゃんとこんないい奥さんを娶っているんだから>, という意味なのか, あるいはそれとも, <若いころにどんなにもてたって, 所詮1人の女のひとしか結婚できないんだから> といった(当時の作者の切実な思いに通じるような)意味合いなのだろうか。
- (11) この個所の解釈についてもゼミ生の読み方も多様で, 文中のような捉え方(特に後者, K. 只野)のほかにも, たとえば, <あなたも若いころには, インディアンの恋人にふられたことがあったんですものね>(Y. 服部, R. 堀場), <いくら物好きのあなたでも, 今でもインディアンの娘に手を出してなんかいないんでしょうねー>(M. 中島, T. 小長谷), <インディアンの娘は遊ぶにはいい相手だわね>(S. 辻)など, それぞれ面白く, しかもそれなりに妥当と思われるものがあつた。
- (12) UA のフライトアテンダントの言葉から。(1995年9月)
- (13) 先住民のおおらかさについては, E. Hemingway, “Fathers and Sons,” *The Short Stories of Ernest Hemingway*, pp. 493, 495. またこれについての評論, Susan S. Beegel, “Second Growth: The Ecology of Loss in ‘Fathers and Sons’” *op. cit.* pp. 87-9.

- また、ヘミングウェイの自然観に関しては、Svoboda, Frederic J. “The Great Themes in Hemingway: Love, War, Wilderness, and Loss,” *A Historical Guide to Ernest Hemingway* ed. by Linda Wagner-Martin (Oxford U. P.) pp. 158–9., Beegel, Suzan F. *op. cit.*, p. 77., および、中村亨「征服民の視線とミシガン」, 『英語青年』, 第145巻, 第5号 (研究社, 1999), pp. 312–4.
- (14) Beegel, Susan F. *op. cit.* p. 97.
- (15) *ibid.* pp. 87, 97.
- (16) ただ、このような解釈は大学1年生のゼミ生には、いささか受け入れがたいようであった。普通の失恋の物語としての読みの方がいいらしい。もっとも男子学生のなかには、この解釈に納得するものが少なくなかったが。
- (17) Young, Philip. *op. cit.* pp. 32–3, および Susan F. Beegel, *op. cit.*, pp. 87–8, 104 (notes) モデルの少女 Prudence Boulton は Dick Boulton の娘で、作者の母親のメイドをしていたという。この時、作者は15才で Prudence は12才、弟は William 9才で、ちょうど “Fathers and Sons” の人物 Nick, Trudy, Billy の年齢にぴったりと合致している。
- (18) *Ibid.*, p. 33.
- (19) Comley, Nancy R. & Scholes, Robert. “Reading ‘Up in Michigan,’” *New Essays on Hemingway’s Short Fiction*, pp. 33–4 Reynolds, Michael. “Ernest Hemingway, 1899–1961: A Brief Biography,” *A Historical Guide to Ernest Hemingway*, p. 30.
- (20) 短編のなかの “Marriage Group” には、*In Our Time* の以下の作品群からは、“Up in Michigan,” “Indian Camp,” “The Doctor and the Doctor’s Wife,” “The End of Something,” “The Three-Day Blow,” “Mr. And Mrs. Elliot,” “Cat in the Rain,” “Out of Season,” “Cross Country Snow,” などが、また *Men Without Women* のなかの “Hills Like White Elephant,” “In Another Country,” “A Canary for One” などが含まれる。Comley, Nancy R. & Scholes Robert., “Reading ‘Up in Michigan’” *op. cit.*, pp. 36–9.
- (21) Barlowe, Jamie. “Hemingway’s Gender Training,” *A Historical Guide to Ernest Hemingway*, pp. 137–142.
- (22) *ibid.*, p. 145.
- (23) Comley, Nancy R. & Scholes, Robert, *op. cit.*, pp. 33–4.
- (24) Gajdusek, Robert E. *Hemingway in his Own Country* (U. of Notre Dame P, 2002), p. 248.
- (25) Beegel, Susan F. *op. cit.*, p. 80.
- (26) 藤野紀男, 『マザーグース案内』 (大修館, 1987), pp. 231–5.